千葉昭彦様（1957 年 2 月 15 日 ～ 2024 年 6 月 17 日）

千葉昭彦 元常務理事（ご遺族様からのご協力により掲載）

物理探査学会において長年にわたり献身的にご活躍された千葉昭彦さんが、2024 年 6 月 17 日に 67 年の生涯を閉じられてから早や 1 年余りが過ぎました。改めまして、ご家族の皆様、関係者の皆様に、心よりお悔やみを申し上げますと共に、会員の皆様と千葉さんのご功績を辿りながら故人を偲びたいと存じます。

千葉昭彦さんは、1980 年 3 月に京都大学工学部を優秀な成績でご卒業され、同年 4 月より住鉱コンサルタント株式会社（現 住鉱資源開発株式会社）に入社されました。物理探査部において同社の資源関連事業の基盤を支える専門的な業務に携わられ、1987 年 1 月には財団法人資源開発大学校への留学を通じて金属資源分野の知識をさらに深められ、1991 年 4 月からは住友金属鉱山株式会社への出向を機に地下空間利用分野にも活躍の場を拡げられました。1998 年 10 月からは物理探査グループのリーダーを務められ、同グループを率いて数々の技術的成果を挙げられました。2003 年 4 月には技術開発部長兼物理探査グループリーダーに就任され、さらに 2004 年 5 月からは営業部

長を兼務し、同社の事業拡大に大きく貢献されました。2005 年 4 月に資源調査本部営業部長兼資源環境調査部次長、2007 年 1 月には工事部長を加え、多角的なリーダーシップを発揮されました。2008 年 6 月 27 日には取締役に就任され、資源調査本部長、資源環境調査部長、営業部長、工事部長、鉱山事業部長、試錐部長などの要職を歴任され、資源関連事業の戦略立案と実行に尽力されました。2022 年 6 月 30 日の取締役退任後も、7 月 1 日より技術顧問として、後進の指導と会社の持続的発展に寄与されました。千葉さんの物理探査技術と経営手腕は、同社の資源調査・開発分野に多大な影響を与え、多くの同僚や後輩に敬愛される存在でいらっしゃいました。

物理探査学会においても長年にわたって様々な分野でご貢献されました。1987 年より庶務委員を務められ、1997 年に庶務副委員長、1998-1999 年に庶務委員長、2000 年に庶務委員、1990-1991 年および 2006-2007 年に標準化検討委員長、1994 年に国際委員、2008-2009 年に標準化検討委員長、2010-2011 年に理事（会員・広報副委員長、標準化検討委員長兼臨時担当）として活躍されました。2012-2013 年、2014-2015 年、2016-2017 年と連続して常務理事を務められ、2018-2019 年には理事として総務・財政委員会を担当されるなど、学会の運営と標準化・国際化推進にご尽力されました。中でも特筆すべきご貢献としては、標準化検討委員長として取り組まれ、2008 年に本学会より発行されました「新版 物理探査適用の手引き」（－土木物理探査マニュアル 2008－）の編纂が挙げられます。同書は、物理探査法の適用範囲と限界、現地作業手順、解析・解釈の詳細を平易な言葉で解説しており、物理探査を実施してデータを収集・分析する若手技術者の実務や、調査結果を利用するクライアントとの情報共有に役立つものです。土木物理探査に関するこのような書籍は世界でも類例が無く、本学会と The European Association of Geoscientists and Engineers（EAGE）との協力に基づき、2014 年に英訳版の「Application Manual of Geophysical Methods to Engineering and Environmental Problems」が EAGE より出版されました。これによって日本の標準的な土木物理探査の仕様や調査手順を海外に広められた事は、本学会の標準化・国際化の取組みの非常に大きな成果であり、物理探査分野の学術的・技術的発展に寄与し、物理探査業界全体の向上に多大な功績を残されました。千葉さんのご功績は、物理探査学会の歴史に永遠に刻まれ、物理探査業界の未来を照らす指針として、後世に受け継がれていくことと存じます。

最後に、少し私的なお話を加えさせていただきます。千葉さんは、大学の 3 年先輩に当たり、学部が異なるため学生時代に直接の交流はありませんでしたが、熱気球やスポーツ観戦、映画といった千葉さんの幅広いご趣味や交友関係も相俟って、お互いに共通する友人・知人が多かった事を後に知って驚きましたし、義父と同郷だったり、同じ教会で結婚式を挙げて互いに驚き合ったりと、様々なところで深い縁を感じました。千葉さんは、本当に人付き合いの良い方で、お酒はけっして強くはないのに、いつも社内外の懇親の場に参加してくださいました。宴席で眠ってしまう事も多々ありましたが、それも千葉さんが愛される所以だったのだろうと思います。仕事においては、CSAMT、MT、TEM、GPR

などの電磁探査、SIP や TDIP を含む電気探査、AGG を含む重力探査など様々な調査や研究開発でご一緒しましたが、技術的に優れているだけでなく、大変責任感が強く、本当に頼りになる方でした。他方、その強い責任感ゆえに難しい問題や課題を独りで抱え込んでしまうところもありました。難しい問題で困っていたら、もっと早い段階で相談してくれていたらと思う事もよくありましたし、千葉さんに対しても遠慮せずそのように申し上げました。そんな時、千葉さんはいつも黙って頷くだけでした。そういう意味で、千葉さんとのコミュニケーションは、こちらからの一方通行が多かったのかもしれないと、今更ながら反省しています。 千葉さんと最後にお話ししたのは、お亡くなりになる直前の第 150 回(2024 年度春季)学術講演会でした。お互いにビジネスとしての物理探査から少し距離を置ける比較的自由な身になった事もあって、物理探査学会の将来像や若い物理探査技術者の育成など、多岐にわたる話題で千葉さんに相談しようと思っていました。講演会初日の朝、千葉さんから「○○さんに会った？」と訊かれ、「朝一番のセッションで見かけましたが…」と答えたところ、「ああ、そう」と言って、こちらが自分の話題を持ち出そうとするところを聞かずに立ち去ってしまわれました。「千葉さんらしいな」と思いつつ、翌日の懇親会やその後にでもゆっくり話せば良いと考え、その日はお話しするのを諦めたのですが、翌日の懇親会では千葉さんは開会時にはいらっしゃったものの、体調不良のため途中でお帰りになったと聞きました。まさか、それから 2 週間足らずでお亡くなりになるとは夢にも思いませんでした。前述の話題を含めて物理探査の未来についてお話ししたい事、お訊きしたい事、お願いしたい事が山ほどありました。あまりに早いご逝去が本当に残念でなりません。 千葉さんの安らかな眠りをお祈りし、謹んで追悼の言葉といたします。

物理探査学会 理事、独立行政法人エネルギー・金属鉱物資源機構 洋上風力事業部 担当審議役 首席研究員 岡田和也